



## 八田與一の日本精神と原子力の関わり

謝牧謙

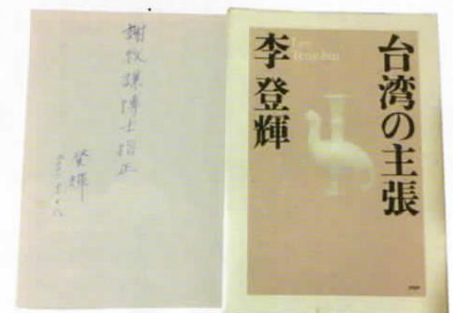
去る9月29日、台湾大学日本研究センターで行われた八田與一の孫 八田修一氏の講演会に出席した。テーマは「嘉南大圳における日本精神～八田與一の生命哲學」であった。八田與一は烏山頭ダムを造り、一生を台湾に捧げた人物であり、台湾で最も有名な日本人でもある。八田與一の日本精神は何であるかという、前総統李登輝氏曰く日本精神は

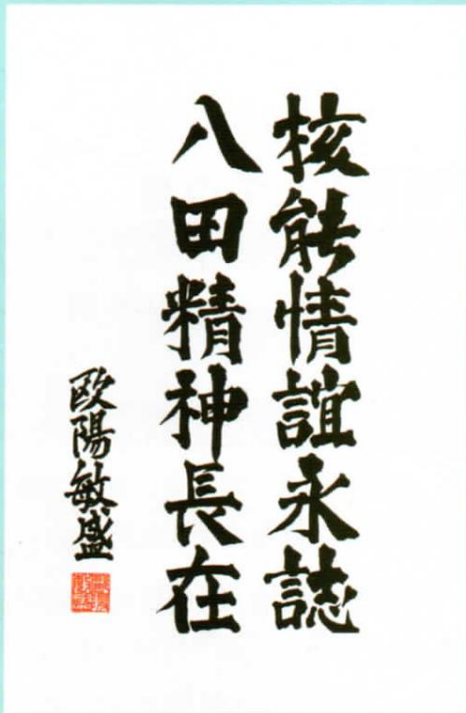
- 第一、氣高い形而上的価値観や道德観。
- 第二、「人間如何に生きるべきか」という哲学や理念。
- 第三、「公に奉ずる」精神ということである。

八田與一ご夫妻が今でも台湾のひとびとによって尊敬され、大事にされる理由に義を重んじ、誠を持って率先垂範、實踐躬行する日本精神が脈脈と存在していると李登輝氏が強調する。

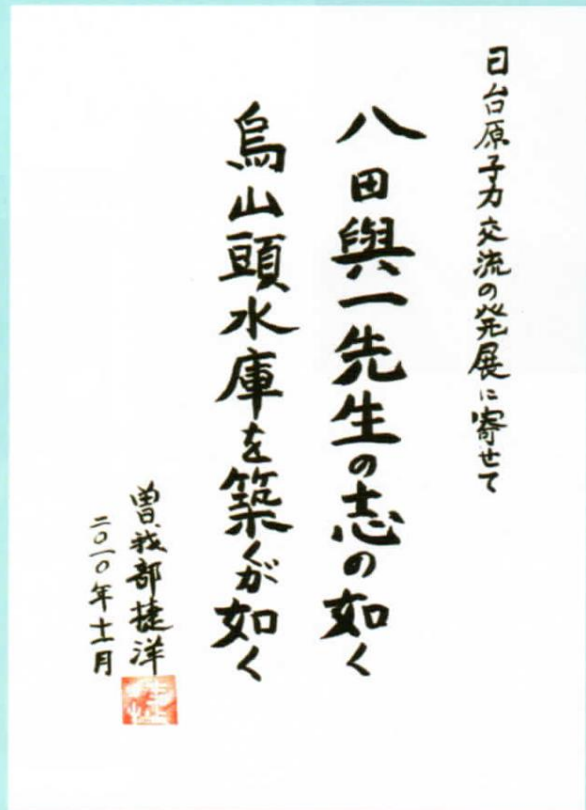
李登輝氏の著書「武士道解題」も日本古来の精神的価値について書かれ、「武士道」は日本精神の華である。日本精神の良さは口先だけじゃなくて実際に行く、真心を持って行うというところにこそあるのだ、ということを忘れてはなりません。

筆者の専門は原子力化学工学、1960年代仙台の東北大学に学び、帰国後、30年余り核能研究所に勤め、15年前にリタイヤした。今はボランティアとして日台、兩岸(中国大陆と台湾)の原子力交流に努めている。福島事故後、一般国民は原子力エネルギーに不安を抱き、国際社会に大きな影響を与えた、なかでも台湾が受けたインパクトは甚大である。台湾と日本の原子力交流は1970年代にスタートし、2003年には日本の原子力安全基盤機構(JNES)と台湾の(財)核能科技協会(NuSTA)の間に協力協定が結ばれ、毎年原子力安全情報交換会を双方交代して開催することになり、第三回目台北で開催の際、JNESの曾我部理事長は自ら団長として参加。その時曾我部団長は、団員に産経新聞に掲載された八田與一の記事を配られた。この配慮に対して、私は「台湾を愛する一日本人技師」というタイトルでエッセーとしてエネルギーレビュー誌に投稿。曾我部理事長はこのエッセーに対するコメントを同誌に投稿された。その文章は次の通りである。





原子能委員会歐陽敏盛種主任委員 ▲



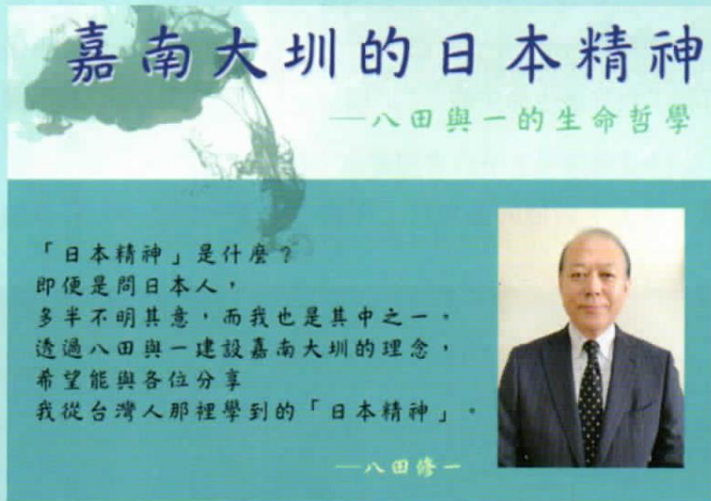
JNES曾我部捷洋理事長 ▶

中華民國建国百周年記念特集「台日核能交流回顧と展望」の書頭題字



與八田修一先生 (八田與一之孫) 合照

2017/9/29 於台灣大學日本研究中心拙著「台湾を愛した—日本技師—八田與一」(エネルギーレビュー誌掲載)を贈呈



「日本精神」是什麼？  
 即便是問日本人，  
 多半不明其意，而我也其中之一，  
 透過八田與一建設嘉南大圳的理念，  
 希望能與各位分享  
 我從台灣人那裡學到的「日本精神」。

— 八田修一 —



八田與一は1932年(昭和7年)台北ロータリークラブに入会。入会挨拶に「ロータリークラブの精神から自利利他にあるように考えさせられまして、入会をさせて頂きました。」と述べている。故人は「技術者には国境がない」ことを身を持って示し、「台湾を愛した日本人」であります。

八田與一の功績は台湾の民主化以後、日台友好の絆の象徴とされております。

◎ 紹介 ◎ 謝牧謙 シャ ボクケン

日本東北大學工學博士  
 台灣大學、輔仁大學兼任教授  
 中華核能學會(CHNS)顧問  
 核能科技協進會執行長  
 「日台原子力交流の回顧と展望」編集長



昨年一〇月、核能協進会と原子力安全基盤機構（JNES）の第三回原子力情報交換会が台北で開催され、事前にJNESの曾我部団長から、源として「のコピー資料が私の手元に届いた。内容は産経新聞に連載された八田与一氏の記事である。特に私の目を引いたのは表紙に、八田与一の志はJNESの志であるべし」とあったボールペンの書き出しであった。

謝  
牧  
謙

台湾を愛する  
一日本人技師

日台間の原子力交流は毎年行う日台原子力安全セミナー、日台工程技术研討会（核能組）と不定期に開催する日華原子力連絡会議があり、JNESとの会合は、二〇〇四年にスタート、専ら原子力安全を対象とした情報の交換会で、毎年、台北と東京で交互に開催し、双方の原子力安全規制と原子力発電所の運転管理技術の向上に大いに貢献、人的交流を通じて友好関係も築き上げた。曾我部団長から頂いた八田与一氏の資料は、実はJNESの出席者全員に出席前に配られたと言う事が後で分かり、私は深い感銘を受けた。

原子力安全は国の境が無く、特に同じエネルギー事情にある台湾として、お互いに協力し合い、更に進んで、相手の文化的背景も理解し、心をふれ合うことは非常に有意義である。会議後、皆さん烏山頭ダムに走った。

（財核能協進会常務理事、輔仁大学教授）

司馬遼太郎の著作のひとつに「街道をゆく」というのがある。人気作家の作品であるからよくご存じの方も多いと思う。誰もが余り知らない昔の立派な人物や歴史の背景を知ることができ非常に興味深い。

その第四〇巻に「台湾紀行」がある。この中に八田與一の章がある。四月号

烏山頭水庫

曾我部  
謙洋

この欄で謝牧謙先生が紹介なさっているところが、彼は、当時の台湾総督府に勤務した土木技術者で、昭和五年に灌漑用ダム「烏山頭水庫」を完成させている。これによって台湾西部の荒地が広大な沃野に変わり、戦後の台湾経済の発展の基礎になったと前總統の李登輝さんも言っておられる。

当時の台湾の山間は未開のジャングルであり、多くの技術者を率いてこの地に住み、苦節一〇年余をかけて完成させている。土木機械は蒸気エンジンであったと言う。八田夫妻の墓はダム堰堤の北端の

丘にある。しかし、私が何よりも感動したのは、戦後排日気風の強かった時代においても、土地の人々が八田與一の業績に感謝し、その銅像を大事にし、ずっと墓を守ってきたことであった。

昨年八月に日台原子力技術情報の定期会合で台湾に出張する機会を得た。初めての台湾で学ぶことが多かった。念願の烏山頭水庫も見学することができたし、謝先生のような立派な方を知ることができ大変幸せであった。先生がいてこそ原子力分野における日台交流の今日があると言ってしまうのではない。その謝先生に、この欄で、私が職員に配布した資料のことにふれて頂いており、真に恐縮している。

八田與一は、高い技術力と強い使命感をもち、誰にも公平であったと言う。このことは、まさに専門家集団としてのJNESの心構えにぴったりのことである。

（独原子力安全基盤機構 理事）